日本女医会誌
復刊第93号
題字　吉岡弥生

昭和五八年新年の辞

会長　三神美和

新年おめでとうございます。

会員の皆さまにはお元気に新しい年を迎えられたことと心からお慶び申し上げます。新年を迎えるごとに思うことは、また一年経ったのか、昨年一年はどんな年だったのか、今年はどんな年になるのかということであります。そして今年こそ頑張ろうと心に誓うのであります。新年は反省の時であり、新しい出発の時であります。皆さまとともに日本女医会のよりよき発展に向かって今年も頑張りたいと思います。

一昨年本会所有の事務所を持ったよろこびをうけて、昨年は毎月の定例理事会には、足許も軽やかに宮益坂通いをしました。一年の間にようやく渋谷駅からの近道も覚え、正しく事務所に行けるようになりました。歩いて十分足らずの運動には適度の場所で、案外静かで、会合にも、事務にもたいへん好適地であります。改めて、狭いながらも地の利を得た本部を持った実感を味わっております。

昨年は本会としては、新しい事業はありませんでしたが、内容的には充実した年であったと思います。五月の総会で図らずも再度、会長に選出されたことは、私にとって身に余ることでございましたが、その責任の重さを一入感じたことであります。ただ役員に多くの新人を迎えたことは、会の若返りのために喜ぶべきことでありました。理事の役務分担もメンバーの入れ替えがあり、各自新しい役務分担に熱心に取り組み、古い会長ではあるが、これら意気盛んな理事を迎えたことにより、本会もいっそう充実したものになるだろうと喜んでおります。

渉外部としては、十一月末のマニラにおける第十八回国際女医会会議がもっとも大きな出来事でありました。

三十九名の出席ではありますが佐野アヤ子先生が国際女医会副会長でありますので、諸外国の女医さんの

もくじ

昭和五十八年新年の辞……三神　美和（1）
特集――国際女医会第十八回国際会議
第十八回国際女医会議に出席して……中村　酉子（2）
桂林の旅……原　弥栄子（4）
バリ島とシンガポール……弓場　光子（6）
国際女医会五十年会員表彰者……（7）
国際女医会参加の折々……卜部美津子（7）
五十年会員の表彰を受けて……清水　友代（8）
各部だより
五十年前の会費（会計部）……佐藤千代子（8）
国際婦人年連絡会報告（渉外部／国内の部）…柳瀬　路子（9）
Redshaw　国際女医会長来日（渉外部／国外の部）……佐野アヤ子（9）
McWeeney 女史東京女子医大を見学（学術部）……橋本　葉子（10）
支部近況
昭和五十九年度総会を引き受けて（神奈川支部）……稲生　襄（10）
思いつくまま（熊本支部）……山本　節子（11）
McWeeney 氏歓迎懇談会に参加して……橋本　葉子（11）
福島県石川町の名誉町民第一号を授与されて……添田　百枝（12）
忙中閑
人形と私……楠目　節子（12）
会員の消息……（14）
理事会議事録……（13）
常任理事会議事録……（15）
会員動静……（16）
編集後記……（16）

来日が多く、その都度渉外部が中心となり、接待し、また理事会としても有志が出席して友好を深めております。また国内渉外としては、柳瀬路子先生が、もっぱらこれに当たり、NGOや各種婦人団体の会合に出席し、婦人団体の一員としての本会の立場を明示しております。このように、国内外にわたる渉外部の活躍は今後ますます重要性を帯びてくるものと思います。少し個人的になりますが、副会長山崎倫子先生がこの度の国連総会へ政府代表五人の中の一員として、唯一の婦人代表として政府より任命され国連総会に出席されたことは、本会にとって誠に喜ばしく、誇らしいことであります。先生はすぐれた語学の才能、十分な国際感覚、広い見識を持たれ、民間婦人団体の中ではピカ一の存在でありますので、推挙されたのは当然のことと思いますが、このようなすぐれた方を本会から出したことは喜ばしいことであります。今後第二、第三、の山崎先生の出ますことを希っております。

学術部としては、森川みどり先生を頭に、藤井倚子、橋本葉子の両先生など学者を揃え、おおいにその活躍を期待しておりますが、先般第一回研究助成五名の抄録をまとめ、配布されたことは、会員の皆さまにもご納得が得られたことと思います。国際女医会の記念事業が着実に実を結びつつあることは本当にうれしいことであります。

広報部もだいぶんメンバーが変わりましたが、皆さまが力を合わせて、よりよい会誌を出したいと頑張っております。先ごろ、創立六十五周年記念誌を完成し、会員に配布致しましたが、会員の皆さまからの評判もよく、たいへんよくまとめられた立派な出来栄えと思います。一致協力がいかに大切であるかを如実に示す成果だと思います。

以上のように、昭和五十七年は総会につづく、新理事の登場、理事の仕事分担など本会の内容整備の年でありましたが、今年はさらにこれらの内容の充実向上をめざして行きたいと存じます。その一つとして本部の活躍もさることながら、各支部もさらに内容を整えご活躍されるよう希っております。いつもその例として愛知県支部をひき合いに出しますが、十年余にわたって社会奉仕をつづけておられるのには頭の下る思いがいたします。私はそこでいつも多数の会員を持つ東京都のことを考えるのであります。各区と都下を合わせて二十四の支部に分かれておりますが、あまり大きくまとまらないというのが事実です。

そこで私はかねてから、東京の二十四の支部が一丸となって何か仕事をするために、各支部連合のようなものをつくり、各支部が連合して一つの目的をもった仕事をしたらよいのではないかと考えておりました。各支部の連絡、研修、社会奉仕などを話し合い相談し合ったらこの大世帯もまとまってくるように思います。今年の一つの課題として、皆さまからよい知恵を出していただきたいと思います。

医師過剰時代に向いつつある時、会員は手を携えて、生活と医療を守らなければならないと思います。また後進の女医がより力強く、男医に伍して社会に活躍することができ、また十分研修できるよう援助しなければならないと思います。このためにはすでに社会人として活躍しておられる先輩の会員が力を合わせて日本女医会を盛り立て、社会的に注目されるようにしなければならないと思います。本年は会員の方々のいっそうのご協力をお願い申し上げ、社団法人としての日本女医会の活躍をよりいっそう盛んなものにしたいと希っております。何卒よろしくお願い申し上げます。これをもって新年のご挨拶に代えさせていただきます。

●特集――国際女医会第18回国際会議

第十八回国際女医会議に出席して

国際連絡書記代行
世田谷支部　中村酉子

"心ある医療"テーマに 30ヵ国の代表集う

第十八回国際女医会議は十一月二十一日から二十七日までマニラのフィリッピン国際会議センターで開催されました。この会議場はマニラ湾に面する広大な敷地に六年前に建てられたまことに壮大なもので私どもの宿泊したホテルプラザに隣接しています。参加国は三十ヵ国。参加者はほぼ千人。日本からは同伴者を含め三十九名でした。

今回のテーマは"Humane Management In Medicine"で意訳すると"心ある医療―医療の人間性"とでもいうことです。

二十一日の午前中にはマニラで最古のマニラ教会の大聖堂で全キリスト教派のミサが荘厳に行なわれ、国際女医会の役員たちが次つぎにお祈りを捧げました。その夜はフィリッピン女医会主催の歓迎の夕が催され文化センターで民族舞踊などの観覧を楽しみました。

開会式には会長Dr. Redshawはフィリッピンの服装で臨まれましたことは一同驚きました。マルコス大統領がKeynote（基調）演説をなさいました。原稿なしで割合に長く、興味深くうかがいました。その要旨は、最近はとかく忘れられているテーマを選んで国際女医会が会議を開くことを賞讃され、ご自分の体験談も語られ、第二次大戦時戦傷のため長い間入院生活をおくっていた際に、もう二度と歩くことはできないのかと悲観していた時に、熱心にはげまして歩けるようにしてくれたのは女医であったと、おおいに女医を信頼されています。また、展示場のテーブカットもなさいました。

講演、ワークショップ等活発に

――藤田・山崎先生が研究発表（紙上）――

学術講演のテーマ「心ある医療」は、六つのサブテーマに分かれています。①医師患者関係、②産科、③新生児、④障害者、⑤危篤および末期患者、⑥老人に対して。

そして各テーマごとにPlenary Session（全員出席の会議）、ワークショップおよび論文発表で構成されていました。日本からは演題は二題〝医は仁術なり〟（藤田親代）、〝老人の健康と福祉〟（山崎倫子）いずれも紙上発表でした。

「危篤および末期患者」のPlenary Sessionのスピーカーはノーベル平和賞受賞者、インドのマザー・テレーサの講演でした。さすがにこの時には会場は満員でした。マザー・テレーサは貧しい臨終患者に温い手をさしのべ、死に対しての心の準備を与えていらっしゃるのです。また、妊娠中絶はどんなことがあっても反対であると強く訴えられていることは印象に残りました。

本学会では同時通訳としては日本語だけが設けられていました。これはフィリッピン女医会長がマニラ在住の皆川先生（御夫君は日本の実業家）に依頼されて費用を負担していただき実現することができましたことを心から感謝致したいと存じます。

心温まる歓待に友好を深める

病院見学は数カ所リストされておりましたが、日本人はマカティ・メディカルセンターを選びました。マカティ地区はマニラ市の南東の丘陵地帯に広がる新興都市で、このメディカルセンターとは一九六九年に建てられた超近代的な五百三十五ベッドの私立病院で、医療費はマニラ市でもっとも高い病院とききました。

医師たちがこの病院内に診察室をもち開業しているわけで、アメリカ式のシステムをとっています。しかし一割は必ずチャリティ・ベッドを持たねばならないという、国の規則通りにチャリティ医療も行なわれています。まず講堂にて理事長の挨拶があり、お茶とお菓子の接待があり、各部門の案内係が紹介され、それぞれ希望する部門の見学をいたしました。見学の時間はわずか三十分余りで、ただちにマラカニアン宮殿に向かいました。この宮殿は一九三五年フィリッピン独立以来、大統領の官邸として有名です。宮殿に入る際には、私どもは長い列をつくり厳重な持物検査とボディチェックをうけ、ものものしい感じで宮殿に入りました。純スペイン風で美しいシャンデリアが輝き、歴代大統領の肖像画やフィリッピンや、スペインの名画が数多く並べられていました。ここでのレセプションはイメルダ・マルコス夫人のお招きによるものでしたが、あいにく夫人は眼の病気の診断のためボストンにいらっしゃっているためお目にかかりますことができず、一同残念でした。宴会も終わりに近づいたころマルコス大統領はいらっしゃって、イメルダ夫人の眼病は只眼鏡をかければよいといわれただけの程度のものであったと報告され、大統領の今年の誕生日九月十一日に出版したご本数冊を寄贈されました。何といってもこの日が社交行事のハイライトというべきものでした。

フィリッピン女医会員によるホス

マニラ・マルコス大統領の招待

あけましておめでとうございます

昭和58年

日本女医会

会長　三神　美和
副会長　小俣喜久子
〃　福永ひろ子
〃　山崎　倫子
常任理事　稲葉　幸子
〃　久保田くら
〃　佐藤千代子
〃　佐野アヤ子
〃　白橋　美笑
〃　野沢　良美
〃　橋本　葉子
〃　平瀬　文子
〃　丸山　芙実
〃　森川みどり
〃　八木　貞子
〃　柳瀬　路子
理事　明石　み代
〃　荒木　律子
〃　石川　文子
〃　石原　幸子
〃　井上　柳子

理事　鵜川美登里
〃　川口　正子
〃　川島富久子
〃　鈴木　文子
〃　関口　喜久
〃　野呂　幸枝
〃　蓮井　敏子
〃　藤井　倩子
〃　藤田　親代
〃　町田　俊子
〃　マッキンストリ千孝
〃　三好　美春
〃　森　智代
〃　山本　杉
監事　添田　百枝
〃　西山喜代子
〃　山口　三重
事務職員　四宮　弥生
〃　木下佐知子
〃　正木　喜子

ピタリティ・ナイトということもあり、外国からの参加者をグループにわけ、自宅にお招き下さったり、またレストラン・シアターに連れていってくださったり心温まる歓待をしていただきました。

各国から持ち寄りの品々のバザーは、二回設営され、大盛況で、とくに日本女医会員からはたくさんの品物を寄附していただき持参いたしましたので、好評でだいぶ好成績でした。（売上は約三千ドル）。

なお日本女医会からは千ドルの寄附もいたしました。募金委員長の佐野先生は熱心に活躍され大成功を収めました。

第19回会議はカナダ・バンクーバーで

総会は二回開かれ、特記すべきことのみ挙げます。

(1)国際女医会の新事務局はドイツのケルン市に移り、名誉書記にDr. Motzelが決まりました。

(2)年会費は従来通りです。

(3)五十年会員は日本女医会員では百十名もあり、もっとも多い国でした。

(4)次の会議は一九八四年七月二十九日から八月四日までカナダのバンクーバーで開かれ、テーマは〝男と女――生物学的・行動的差異〟。

(5)一九八六年の開催国は未定ですがテーマはAdolescence（思春期）です。インドと南アフリカが招待していますがおそらく欧州での希望が多いようです。

(6)西太平洋地区の副会長には韓国が選ばれました。

最後の宴会では新旧役員の交代のご挨拶があり、新会長はフィリッピンのDr. Gomezです。またこの席でもオークションやラッフルのプログラムがあり大成功で合計千八百三十ドル得られました。

ラッフルの賞品は一等から三等までは日本女医会員が寄贈いたしました品々でした（藤娘人形、時計、真珠ブローチ）。ダンスをしたり会場はたいへん華やかな裡に幕を閉じました。

今回の国際女医会議を終わって私どもはただ高度な近代的な医療機械のみに頼り過ぎている現状を反省し、もっと患者に対し心理学的な面を考えて治療に従事してゆく覚悟をきめました。

佐野先生は募金委員長を辞され、今度はプロジェクト・コミティの委員長を引きうけられました。

第18回国際女医会議決議

決議一
患者の健康に関してよく説明をして医師から何を期待すべきかという事実に関し効果的な情報を与えるよう推進する。

決議二
過疎地により良い医療とパラメディカルなサービスを拡張するよう推進する。

決議三
妊娠や分娩に対し心ない非人間的医療が行なわれる。しかし妊娠や分娩の異常には多くの有効な技術的操作は必要である。そこでルーチンにこのような技術操作を用いるのではなく注意深く適応のある場合にのみ行なうこと。

決議四
ある国においては産婦人科の女医が少ないのでこのような国では産婦人科専門医を増やすよう推進する。

決議五
国際女医会は女子の儀式的割礼を行なうことは承認しないことを記録する。これは女性の肉体的精神的に悪影響を及ぼすことをWHOその他の機関に提案し注意を促す。このようなことを行なっている国ではもっと教育し根滅すべきであることを提議する。（アフリカのある地方では少女が十一歳くらいになると陰核の割礼を行なう風習があるため）。

決議六
ホスピス運動のための機関を奨励する。

決議七
医学校の教育課程にリハビリテーション医学を入れるように推進する。

決議八
障害者が自分を大切にすることを奨励し、一般社会に対しできないことより、何ができるかという能力を強調し、広報活動を奨励する。

決議九
障害者の状態を向上させるために公の予算を配分するよう勧告する。

決議十
国際女医会は、できるところでは、障害者にとって障壁となっている段差などを改良する建築法を実現するよう支持する。

決議十一
母乳栄養の推進。重要さを強調したい。
a)WHOの規則によると母乳の代用品を奨励しないで母乳を奨励する。
b)公衆衛生にたずさわる人および一般の人を通じ、強く動機を与えること。
c)産科病棟には産室を作り母乳栄養の設備を準備する。
d)プライマリー・ケアーの段階で、母乳栄養の効果を評価する計画をたてる。

決議十二
近代的な医療技術は医師と患者関係を邪魔する傾向にある。とくに老人の医療において。そこで家庭医の役割を強調することを奨励する。

決議十三
老人に敬意を表し長年にわたり地域社会に貢献したことを認めることを職業、家庭、社会、一般において強調すべきであることを奨励する。

決議十四
教育課程においてGerontology（生理的老化）とGeriatrics（病的老化）とは別個のものであることを教え、総ての老人を病的・障害者・資格のない人として取り扱わないように奨励する。

桂林の旅

神奈川支部　原　弥栄子

華やかな晩餐会で第十八回国際女医会議が終幕した次の早朝、マニラ空港へ向かうバスに乗車した時から「桂林の旅」が始まった。三神先生以下十八名、それに交通公社の奥村君が添乗してホテルを出発した。

香港まで二時間の空の旅。午後三時十五分出発の広州行の快特列車に乗りこむ。

かつて訪中された先生方の話では、国境はいったん降りて歩いて国境線を通られたとのことであったが、今では国境もそのまま、ちょっと止まったくらいで通過、中国に無事に入

国していった。白い柵で境された国境線だが、それを過ぎると窓外の風景は一変する。

広々とした耕地が展開して、時間が止まったように、水牛がのんびりと草を食み、二毛作なのか、稲刈していたり、稲束が並べられていたり、水牛に鋤をひかせて黒い土を返している田もある。水牛の背中に子供がねころんでいる姿、線路際の揚柳の並木、大きなガジュマルの木、砂糖黍の畑、すべてがのんびりとしている。

広州へ着き、出入国の手続きなどすませ、ホテルに向かうころはもうとっぷりと日も暮れた。

白天鵝賓館（ホワイト・スワン・ホテル）は、未完成ながら立派なホテルで、部屋も清潔で従業員も若くて可愛いく、まだすれていないところが良かった。夕食は豪華なホテルの食堂で全員が円卓を囲んで広東料理をいただき、中国での第一夜は、快適であった。

次の日は降り出しそうな曇天で気温もやや低かった。ガイドの若い女性は日本語も上手で、てきぱきとエリート的な感じでわれわれの質問に、答えてくれた。まず中山医学院を訪ねるが、あいにく日曜日で見学はできず、見事な前庭の噴水と花壇を背景に写真をとった。続いて近くの広州蜂起烈士陵園を訪れる。ちょうど菊花展が開かれ、日曜日でもあって、たくさんの善男善女が休日を楽しんでおり、二十六万平方メートルという広い陵園は湖もあり、松柏という常緑樹も多く、周恩来氏の題字が刻まれた玄関の両壁から中をみると、折からけいとうの紅い花がたくさん植えこまれ、烈士の偉業をたたえているようであった。ついで六榕寺へ向かう。ここには蘇東波の書いた六榕という字額があり、内側は十七重、外側から見ると九重の塔が中空にそびえて見事なものであった。

「玉」の工場を訪れ、玉彫りの作業を見せてもらい、今さらのように中国の人の器用さに一驚した。ショーウィンドウが空になったのでないかと思われるくらいの先生方の購買力であった。昼食は、広東料理で有名な陶陶居、食事は本当においしく、食後に中村先生から、今回の国際会議のご説明などあり、われわれとして反省することもあった。

悪天候のため、飛行機の発着が遅れ、約一時間以上遅れて、目的の桂林へ着いた時にはもう真暗であった。宿舎の甲山ホテルは、桂林一のホテルだが、郊外にあるので、街灯のない暗い道をひたすらバスが走った。ホテルは急造されている部屋が多いが、ちょうどアメリカ中部のホリディ・インといった感じで、濁ってはいるがお湯も出て、暖房がついていたのは嬉しかった。

次の日はすばらしい快晴。ホテルの前すぐに山が迫り、ホテルの裏には桃花江が流れ、対岸にも山が直立し、澄みきった空気を肺いっぱいに吸いこめば、遥けくも来たという思いで胸がいっぱいになる。さあ待望の漓江下りである。ホテルから、解放橋とよばれる舟着場まで、約一時間くらいもあろうか、バスの窓から眺めると、両側に山々が連なり、そびえ立つ。いく重にも重なっている山々は、その色を変え、われわれの目前に前世紀的な風景を演出する。人民服を着た解放軍兵士たちが、自転車で出勤してゆく。赤土を切り出して日光で干して、土の煉瓦を作り、築いている土の家も数多く見られるが、低い白い土塀をめぐらした大きな家は、解放前は地主のものであったろうか、まさにパール・バックの「大地」の世界であり、タイム・マシンにのって一世紀をさかのぼってきたような気がした。

走るにつれて、山々が真近に屹立し迫ってくる。大地は赤く、山の立上るさまは、たくましく、強かに傲慢にすら見える。東山魁夷氏の絵に見る幽玄なさまとちょっと変わった印象をうけて一瞬とまどう。しかしシルエットで見る時、山容の美しさは一入である。解放橋から東朔までの八十三キロメートルを遊覧船で漓江を下る。川幅もひろくゆったりとした漓江の流れはまたよく曲る。曲るたびに、新しい山が姿を見せ、奇峰が林立し、少し秋めいた山の色と、水の色が照り映え合い、千変万化の風景は、筆舌に尽くし難い。何艘もの鵜飼の舟が川に浮かんでいる。この水上生活者たちは鵜によって生活の糧を得ているのであるが、ゆうゆう迫らず川の流れに身を託して生きている姿は、いったい強い民族なのであろうか、弱いのであろうか考えさせられる。このあたりは、チワン族の自治区とのことで、小数民族保護政策をとっている今の中国では、こうして観光客が増えてゆくのは、どういう影響を与えるのだろうかと考えてしまう。

とにかくこの風景の素晴しさに酔っているうちに東朔に着き、舟を降りる。帰りはデコボコ道を走るが、道路工事もすべて人力。日本人には

桂林

催しのご案内

一、研修会

日時　昭和58年2月27日（日曜）

場所　東京新宿　京王プラザホテル

概略は会誌92号に記載されていますが、さらに後日、別便にて詳しくご案内いたします。

一、総会

日時　昭和58年5月28日（土曜）

場所　岡山市　岡山プラザホテル

概略は会誌92号に記載されていますが、さらに後日、別便にて詳しくご案内いたします。

諸先生には何かとご多忙のこととは存じますが、お誘い合わせの上、多数ご出席をお待ちしております。

気の遠くなるような工事だが、人海戦術でうまくゆくのかも知れない。通路の傍で立っている子供たちは可愛かった。象鼻山と呼ばれる、象が鼻を水につけているような形の山があり、その傍まで降りてそこからの眺望を満喫した。いったんホテルに帰ってから、ガイドさんに連れられて、有志が京劇を観た。演目は「孫悟空」。おなじみの筋書なので、理解できたし、大げさな目張りや隈取りの化粧に、金襴の衣裳はなかなか見事で、舞台いっぱいに、軽快に、かつダイナミックに踊りまくる京劇は、力強い躍動感があって、なかなか楽しかった。

桂林最後の日は少しゆっくり起きて、まず動物園にパンダを訪ねる。人には馴れない動物だときいていたが、飼育係兼売店の売子といった若い男が、「キュウキュウ」と呼ぶとお尻をふりふり小屋から出て来て前肢を上げて竹をねだる。動作の一つ一つが可愛くて、とくに前を無防備に開いて、竹をかかえて食べる様子は何ともいえない。動物園を出てまた友誼商店に寄ったが、先生方がお買物をしている間、ちょっと桂林の街を一人で歩いてみた。桂林の名は、桂花、つまり「金木犀」の木が街路樹として植えられており、まだ少し花をつけている樹もあるが、咲き揃う季節にはさぞ街中が良い香りに包まれることであろう。一人で甲山ホテルの前の道を歩くと、土葬されたお墓が縦穴のようになり石に彫刻されている蓋のようなものが並んでいて、野菊が咲きみだれているのも印象的であった。

一同そろってバスに乗り、芦笛洞という鍾乳洞へゆく。内部は良く整備されていて、照明も効果的につけられていて美しかった。桂林のガイド嬢は、まだ八月になったばかりというだけあって、現在形、過去形、進行形などがメチャクチャの日本語で、何を説明してくれているのか良く分からなかった。

この芦笛洞を出て急坂を下っているとき、後から自転車が猛烈な勢いで駈け抜け、H先生の鞄にふれて、先生が転倒、足を痛められた。ただちにバスを桂林市の人民病院に向けて、病院で漢方の治療をうけられた。幸に骨折はなかったようだが疼痛が強くてお気の毒であった。突然のハプニングであったが、一度中国の病院をみたいと思っていたのが実現した訳である。短日の夕日が落ちて真紅に染まった空に、黒いシルエットになった山の間から白い大きな満月が上って来たのを、バスの一瞬の窓に見た時は、息をのむくらい美しい景色であった。

また飛行機にのり広州へ着き、今度もホワイト・スワン・ホテルに一夜をすごした。広州からはH先生に車椅子を利用できることになり、香港、成田と実によく連絡できていたのには、感謝した。

十二月一日、広州から九広鉄道で香港へ、香港から成田へと、本当に世界もせまくなったと痛感したが、中国全土に比べればこの旅は本当に小指の先くらいでしかないと思うとき、中国の大きさを感ぜずにはいられない。われわれはもう二日から戦争のような毎日を送っているが、一行の皆様と過したあの旅の日を、心豊かに思い返し感謝している次第である。

バリ島とシンガポール

大阪第七支部　弓場　光子

マニラ会議終了翌日、「バリ島・シンガポールコース」はまずシンガポールに飛び、今までの疲れもなんのその、観光、ショッピングとエネルギッシュに行動し、ついでガルーダ・インドネシア航空にて、ジャカルタ経由、デンパサール着。途中ジャカルタで税関通過時に一同不愉快な思いをいたしましたが、魅惑の島、地上最後の楽園バリ・ハイアットホテルのふんい気、冷たい飲物のサービス、それに添えてあったグラジオラスの一輪で、いっぺんに心がなごやかになりました。

今回「バリ島・シンガポールコース」にはなにがなんでも参加したいという念願がかなえられ、大喜び。やはり想像どおりで、ブックガイドの文句を引用すれば緑の椰子に青い空と海、きらきら輝く太陽、オゾンをたっぷり含んだおいしい空気。樹木の間をとびかう小鳥たち、ランやハイビスカス、火焔樹、それから日本のくちなしによく似た白い花で香りも同じ、マニラではカラチュチ（仏花）、バリではKAMBOZAという香りも鮮やかな熱帯の花ばなが所せましと咲き、微笑をなげかけて迎えてくれているかのようなロマン香るやすらぎの島で、マニラの高温多湿とちがい、季節的には雨季であるが今年は雨が降らず、気温も二十七度くらいで木かげに入ると頬吹く風が心地よく感じられました。

バリ島

われわれ平均的日本人は、のんびりとレジャータイムを巧みにエンジョイすることががいして下手で、さっそく観光に出発。デンパサール博物館、アートセンター見学、またまたジャワサラサ（パテイック）、銀細工、木彫りとショッピング。

夜はバリの舞踊の中でもとりわけ印象的な約百人ほどの半裸の男たちが楽器なしで猿のなき声をまねて、〝ケチャケチャ〟と声をあげながら踊る「ケチャックダンス」に感動し、夕食はPuri-Anindita レストランで豪華なロブスターの塩焼に舌づつみをうち、オプショナルツアー最後の夜に乾杯しました。

夜、南十字星の可憐な光を見ることはできませんでしたが、白砂、波の音、ムードたっぷり。今ここで素晴しいロマンスが生まれないかと人知れず心に思いうかべたが、残念なこと、皆アベック。

翌二日目はレジャータイムを楽しむ組と、キンタマーニ高原行に分散。レジャー組はスイミング、ゴルフ、モーターボートと日頃の憂さを十二分に発散されたようです。観光組も朝からこれもバリダンスの一つである、バロンの踊り（カメランという

バリ独特の楽器を使用する踊り）見物、タンパクシリン（聖なる水浴びで知られる美しい水浴場のあるところ）に寄りキンタマーニ高原にて昼食。目の前に広がるバツール湖とバツール山の展望がハイライトでした。

バリは東京都の二倍半ほどの大きさで、人口二千五万、ヒンズー教が九十%で、島民は信仰心厚く、心の優しい人たちだそうですが、貧困な人が多く、観光客にむらがる物売りの子供たちの姿はことさら哀れをさそいます。

当院院長が終戦直後、軍医としてバリにて約半年間抑留生活を過した当時も楽園であったそうですが、日進月歩、年々観光資源が投入され、最後の楽園が俗化されないことを祈ります。

国際女医会参加の折々

京都支部　卜部美津子

このたび五十年会員に登録されて光栄でもあり何かお恥かしい次第です。

私は昨年五十年のクラス会をいたしました。むずかしいテーマ等は女医会誌におまかせして時々参加した思い出の一こまをのべて責を果たしたいと思います。

会議には列席しますが発表討論等は理解不充分でひたすら参加して会員意識を表わすのみでございます。

ちょうど十五年ほど前メーヨークリニックを見学して、規模の大きさと進歩した組織に肝をつぶした思いでした。その折、ドイツの女医が一箱のイチゴを一人で召上がるのを見て圧倒され、私の貧弱さをつらつら自覚しました。ここで私は国際女医会の入口をのぞいたようでした。

その後メルボルンでは温かく心くばりされた晩餐会でお仲間入りして少しばかり自信を得ました。

帰途空港の一室で会議の模様を説明されて、今さら頼りない会員だと一人で苦笑しました。

次は東京において、多数の会員のお骨折で立派な記念すべき会が持たれました。日本はやはりせまくても女医は多数だと心強く思ったものです。その中で私は和服の美しさを一入感じました。

一昨年は伝統の古いイギリスで催されようやく私も会員の一人かなあと思いましたが、後進国の女医たちのたくましさにくらべ、日本の女医のおとなしい事、医師としての自覚等にては大いに自負してるつもりなのに、その折は役員のご苦労をお察しできる思いでした。

しかし日本の女医様のお買物のすさまじさに、女医会は変わったのかしらと驚きました。

イギリスの自然は美しくて忘れ難い会であり、何か申しわけなく楽しい旅をいたしました。

私はミッションで老人ホームや施設を見学したり、遺跡をたずねて旅をします。女医会でも民族、組織の異なる医療設備を見聞して、島国日本の私たちの頭をサラットして広くしたいものです。京都にいてあまりにも多い会合と多くの大学等の間で何もできないでとまどう自分に今一度問いかけつつ。

どうか若い女医様たちに充分な語学を以って幅広く楽しく国際女医会員としてご活躍されますよう望みます。

国際女医会五十年会員表彰者（敬称略）

北海道支部　今　鸞子　冨樫キヨ
　　脇本トキ　森田キヨ
青森支部
岩手支部　長沢秋子
富城支部　田中えつゑ
群馬支部　高間美さ保
埼玉支部　今井喜美子　佐々木道子
栃木支部　佐藤菊子　桜井ふぢ
　　細川モモ　高橋志津江
茨城支部　江田フジ　岡野はな
　　松岡知恵子
千葉支部　梶原寿栄子　林　千代
足立支部　加藤よし
荒川支部　関口睦子
板橋支部　小野田加津　服部捨子
板橋支部　武藤佐代子
大田支部　鮫島寿美江　中川冨士
　　矢島安子
葛飾支部　西川ヲサ子
江東支部　高地孝子　諸橋たけ
品川支部　若園みち子
新宿支部　近藤トシ　良田圭子
杉並支部　加賀美みや　栗林サト
　　福田　貞　松野ふく
世田谷支部　桑原くめ　徳永恵子
台東支部　佐藤絢子　田中あや
練馬支部　阿部秀世　新田志ず子
都下支部　沖　文恵　野村あい
　　小石登志　田村晴子
神奈川支部　沖津くら　国谷喜美子
　　蔵持静江　二見とめ
　　若木しづ
山梨支部　石井美子　石原たけぢ
静岡支部　清水友代
　　伊藤紀子　小笠原きよ
　　小沢虹子　勝呂悦子
　　三宅　隆　山内千枝
愛知支部　伊東あさを
　　内堀なつ子　斉藤貞子
愛知支部　新実静江　林いね子
　　堀尾ふみ子　山口銀子
長野支部　市辺千代　金井つな子
　　北沢千代子　佐藤千代子
新潟支部　遠藤ハナ　土田　巴
富山支部　伊藤梅雨子
石川支部　一林なを
三重支部　玉田まさ　中西三栄
滋賀支部　横矢　静
奈良支部　久　貞
大阪三支部　北川満子
大阪六支部　元　フミ
大阪八支部　榊原だい　森井ツル
京都支部　卜部美津子、北村艶子
兵庫支部　出浦トモ　植村鎮子
兵庫支部　大塚　文　多田貞子
　　林　とく
岡山支部　井口与志子　林　益美
広島支部　大前友枝　坂井タマノ
　　柴原松子
鳥取支部　庄司泰子　須山秋子
島根支部　池田増子　須山富子
　　土肥幸枝
山口支部　三沢三代
香川支部　香西ミネ子　東条松子
愛媛支部　三木豊子
福岡支部　柴田冨美　水戸浜江
佐賀支部　千住冬子
熊本支部　宮山ふみ　若江百恵
鹿児島支部　肥後ヒロ

五十年会員の表彰を受けて

山梨支部　清水　友代

一九八三年の新春を迎え、全国会員の先生方には増々お元気でご活躍の事とおよろこび申し上げます。

このたびマニラにおける国際女医会議開催に際しまして、五十年会員の表彰をいただきましたことは思いがけないよろこびでございます。五十年といえば半世紀になるわけですが、早いもので夢のように過ぎ去った感じでございます。ここにあらためて過去をふり返ってみますと、現在では女の医者も珍しくなく、男女平等、同権などと女性運動の盛んな時代ですが、私どもの医学生のころは特殊な人物のように思われていた時代でした。女が医学を志ざす事には、女学校の先生でも反対する方もあったくらいでした。私も自分からとくに進んで受験したわけではなく、親のすすめるままに医学部に進学したのでした。卒業して東大病院の某教授にご相談にまいりましたところ、「女が医者になぞなって！まあ往診のない眼科にでも」と言われ、そんな事から私は眼科を選びました。

大東亜戦争の時は甲府に開業しておりましたが、主人の出征中に甲府の空襲によって診療所も戦災にあい、小さい子供ら三人看護婦等と、田舎の父の医院にのがれました。当時男の先生方はほとんど応召され残るは老医ばかりの時代でしたが、そんな時私が医者であった事により田舎の方たちのために少しでもお役に立てばと一生懸命働いたものです。周囲の方からも感謝されつつ勉強しながら、専門外のクランケもできる限り診てあげた事など、良き思い出となりました。

五十年表彰を頂戴するにあたり、医者であった事にあらためて心からのよろこびを感じております。長い人生にどんなピンチに出合っても強く生きぬくことのできましたのは医師という職業を持っていたからこそとしみじみ思います。

それにつけても、後になりましたが、女子のための医学部創設者の吉岡弥生先生、額田晋先生に心から感謝申し上げたいと存じます。

日本女医会の先生方も五十年―七十年―八十年とご活躍下さいまして、社会のために尽くされます事をお祈りして、この度の受賞に対する感謝のことばといたします。ありがとうございました。

各部だより

会計部

五十年前の会費

会計部　佐藤千代子

第四條　本會々員ハ年度會費金參圓ヲ毎年二月中ニ、二月以後ノ入會者ハ入會後ニ、之ヲ納ムルコト。本會々計年度ハ毎年一月ニ起リ、十二月ニ終ルモノトス

第六條　本會ハ毎月一回例會（名士、學者及ビ會員等ノ講演、報告、討議、實驗、失敗談或ハ臨床茶談會等―會場ハ主トシテ……）ヲ催シ、次デ當日有志者ノ晩餐宴（晩餐費約壹圓―當日持參納付ヲ開ク

これは最近見つけました「昭和八年一月二十二日。第一回總會議決の名古屋内科會申合セ」です。昭和八年が二十回総会ですから大正三年くらいの発会でしょうか。ともあれ五十年前の規約はいささか感慨深いものがありました。会費に関する部分だけ抜粋しましたが、日本女医会はそれよりも早く、すでに明治三十五年に結成され、大正三年には第一回の総会が開かれています。大正二年には日本女医学会雑誌が発刊され、それに八条からなる会則が付記されておりますが、会費についての条項はありません。その後の古い資料の中にはおそらく断片的に会費の記録があるかも知れませんが不明です。

日本女医会の会費についての明確な数字は、昭和三十年、戦後第一回総会が開催されてからです。古い規約に関連して会費改定の推移をみてみました（表1）。この数字変動をその時々の背景、すなわち社会状況や物価と照合してみたいものと思っています。

表1

昭和30～34年	300円
35～36	500
37～42	1,000
43～47	1,500
48～50	2,500
51～54	4,500
55～	8,000

現実に戻りまして、会計の考えることはいつも会費納入に関することばかりですが、最近十年間の平均納入率を記しますと（各支部別については会誌九十号に棒グラフで表示）表2の通りです。この数字からは、長期滞納者の自然退会による現象を主として、女医会内部の歴史的背景も多少関与しているのではないかと考えられます。ともあれ今年度十一月末日の納入率は六十一％です。昨年度の七十五％は過年度会費納入額が多く、そのため高率となって、お陰で会費を据え置くことができまし

表2

年度	納入率	会員数
47年度	53%	4524人
48	59	4627
49	56	4675
50	57	4692
51	58	4032
52	63	3934
53	62	3928
54	60	3866
55	57	3738
56	75	3030

ると思うほどで、そのうちにと思ってお忘れの方も多いことと思います。未納は納入された方々への借金であると思います。来年も会費据え置きで運営できますようぜひ完納を願っております。会費百%納入率を初夢に。

昨今の私どもの繁忙は医療以外の要素も多く、人間性を否定されていた。

渉外部（国内の部）

国際婦人年連絡会報告

渉外部／国内の部　柳瀬　路子

四十八団体連絡会の今次の議題の主なものは次の二点であった。

行政改革に際して婦人問題にしわ寄せが行なわれている傾向がある。婦人少年局が廃止にならないよう、また国家予算になっている婦人保護費が地方に移管されないよう申し入れを行なう。

優生保護法改正法案を厚生省が国会へ提出する動きがある。この件に関し看護協会と有権者同盟と並んで日本女医会の意見を求められたので（総会にかけた統一見解ではない事を前提として）、日本母性保護医協会が公表した声明文を説明し、優生保護法第十四条第四号から経済的理由を削除する事に反対する旨を述べた。反対理由として、○削除により増加する非合法施術によって妊婦死亡率が上昇するであろう事。○堕胎罪の顕現によって起こる社会の混乱。○それらの理由によって現在法律緩和に向かっている世界の趨勢に逆行するものであること。○中絶件数は統計上減少しつづけているのにその必要があるか。○わが国の被保護世帯は昭和五十六年なお七十四万世帯で百四十二万人。貧困が解消されたとはいえない。○重症障害児出生の怖れある場合胎児適応のない現在は出生による経済的圧迫に理由を付けて中絶を行なっている。○十代妊娠への対策は社会環境の整備や教育こそ先行すべきで、法の規制で防止はできない、等の理由を説明した。山口三重監事も出席されて日母の運動を説明された。

結果として本法案は婦人の意見を容れ討議されていないこと、国連の人権宣言、婦人差別撤廃条約にも低触すること、経済的理由の削除を法制化するより以前に整備しなければならない事を理由に、全会一致で反対決議が成立した。

なお優生保護法改正反対に関しては日本女医会はもう一つ「優生保護法改正阻止連絡協議会」に加盟しているが、その第二回の集まりが十一月十一日市ヶ谷のルーテル第一会議室で催された。この会合ではその後の連絡協議会の動き、その他の外郭団体の動き、政府の動き、今後の見通しおよび対策についての説明があった。

（57・11・23）

渉外部（国外の部）

Redshaw国際女医会長来日

渉外部／国外の部　佐野アヤ子

十月一日、国際女医会長であるオーストラリアの Redshaw 女史が日本を公式訪問されました。マニラで行なわれる第十八回国際女医会開催を前にしての公式訪問で、韓国訪問を終えて日本に立ち寄られ、次にはインドを訪問されてからマニラへ入られる予定というお話でした。三神会長のご都合がつかなかったので成田空港には私が会長代理でお出迎えに行き、夕食は平瀬常任理事とともに赤坂の樓外樓へご案内しました。日本の家庭に泊りたいというご希望だったので、馬込の私の家に四日まで滞在していただきました。

二日目は小野春生元国際女医会長が盆栽の製作工程を見学にご案内。夜はホテル・オークラの「山里」の日本料理で理事会主催の歓迎レセプションを開きました。和食もご本人のご希望でして、お箸の使い方のお上手なのには驚きました。ニューヨーク滞在中の山崎国際連絡書記の代りにマニラで連絡書記をしてくださる中村酉子会員が通訳をしてくださいました。

ホテルオークラ「山里」にて

翌三日目は柳瀬常任理事と歌舞伎座へご案内しました。演し物が「俊寛」、「義興の最期」というような地味なものであったのに、英訳のイヤホーンも使わず、プログラムに目も通さずに、私は肌で感ずると言って、要所要所で感動しておられるので、隣席のご婦人がすっかり感心してしまって、芝居がハネてからしげしげと眺めて一言述べていった一幕もありました。その夜は最後の晩餐ですので、柳瀬常任理事の家でうなぎの蒲焼や南瓜・芋の煮物など日本のお惣菜のおもてなしをしました。

翌四日午前十時のフライトで次の訪問国へ旅立たれましたが、日本の

四日間はたいへん楽しかったようで、日本の会員諸姉の友情に心から感謝します。ぜひマニラで多勢の皆さんにお目にかかりたい。というメッセージをお伝え願いたいということでした。

学術部

McWeeney女史東京女子医大を見学

学術部　橋本　葉子

去る十一月十六日、アイルランド女医会の役員をしておられるMcWeeney女史が来日され、東京女子医大病院を見学されました。渉外担当理事の柳瀬路子先生と私がお供いたしましたが、時間が限られていましたので、心臓血圧研究所（心研）、消化器病センターおよび脳神経センターの三センターの見学に留めました。案内役もなるべく女医さんをとのご希望でしたので、心研は高林和佳子先生、消化器病センターは白鳥敬子先生、脳神経センターは竹内　恵先生にお願いいたしました。まず心研から始めましたが、案内役の高林先生が家庭の主婦も兼ねていることが分かりますと、女医と家庭の両立について、大分細かいことまで質問しておられました。心研内の手術室では当日、消化器外科の手術をしていましたが、アイルランドでは現在は「胃潰瘍」は手術の適応ではなく、内科的に治療すると言っておられました。心研の後、消化器病センターに行きましたが、ここでは病室は見学せず、応接室で消化器病内科の神津忠彦助教授も加わり、もっぱら討論をいたしました。女史は老人に多い疾患名とその治療に関心を示したばかりでなく、日本の医療制度に深い関心を示し、具体的な例を挙げて討論をされました。次に脳神経センターに行き、最新の診断法を見学されましたが、診察室に置いてありました知覚異常の診断に使われる「筆」を見て、珍しがっておられました。最後は、案内して下さった先生方に三神会長も参加して討論会を行なう予定にしておりましたが、女史のご都合が悪くなり、討論会は打ち切りにいたしました。約三時間の短い間でしたが、若い女医さんたちと話し合う機会も持てましたので、ご満足いただけたことと思います。

支部近況

昭和五十九年度総会を引き受けて

神奈川支部　稲生　襄

五十七年五月総会のほんの少し前、急に表記の件を依頼され、支部会員の皆さまに相談する間もなく役員と数人の先輩の諸先生にご相談してお引き受けしました。この事は総会席上、そして会誌九十一号（七月発行）に出ておりますし、会員の皆さまには六月二十日総会の案内状にも書きましたので洩れなくご承知の事と存じご協力のほど改めてお願いいたします。

この稿がお手許に届くころは次々年ではなく次年という事になりますので、五月開催の岡山県総会にはできるだけ多勢ご出席下さり、日本女医会の在り方、そして活躍ぶり、また日本医師会があるのになぜ日本女医会なるものがあるのか等とくとご自分の眼でご覧いただきたく念じております。

さて後一年半足らずの事ですが、いまだ何一つ具体化しておりませんが、気持だけは張り切っております。東京、愛知につぐ会員数（二百名）をもちながら支部総会や支部催しの参加者ははかばかしくなく、毎回苦慮いたしております。日本女医会に限らず、国際女医会や国体などでも開催国、開催県は異常なまでの出席率が通常です。今回マニラでの国際女医会会議でも、九百七十七名中自国会員は五百十八名で、実に盛大で心あたたまる会でした事は、目を見はるの思いがいたしました。とくに開会式へのマルコス大統領のご出席と意義ある挨拶、また数日後イメルダ夫人の招待パーティには、米国へ眼の治療に行かれたとの夫人の代理でまたもやご出席、親しく挨拶をされて、いく人かの人々と握手をされ、美術館以上の邸内をすべて開放されて、ご馳走もたんまりで一同大喜びでした。

また会議場も立派で（国際通貨基金による建物とか）、ここでの歓迎会ならびにサヨナラパーティも素晴らしいものでした。観光資源も多く、ふんだんによい所を見せていただいたが、コレヒドール島やモンテンルパでは、四十年前に思いをはせ感慨無量でした。

脱線しましたが、総会当日の会場はやはり「ミナト横浜」で行ない、百余年の歴史をもつ古い横浜と、十年前西口を、そして昨年立派に改装成った新しい横浜駅東口もぜひ見ていただきたく、唯一つの名園「三渓園」や「港の見える丘公園」等も予定しております。また中華街へもぜひぜひ。

東京に近い横浜は通過されやすい所、こんな時でもないとゆっくりご観賞できないのではないでしょうか。余裕のある方には江ノ島、鎌倉や箱根の方にもぜひ足を延ばしていただきたく、北海道から沖縄までどうぞ多勢の先生方にご参加いただきたく、心からお待ち申し上げております。

長寿園にて入居者と共に

神奈川県の詳細は会誌八十六号（五十六年四月）に書きましたので、どうぞお見直しいただきとう存じます。

神奈川県では毎年六月か七月に総会を開き、秋か春に講演会ならびに懇親会をいたしております。その他会員のコミュニケーションの場として、「古典」と「英会話」の受講を約十年近くつづけております。前者は月一回で現在「源氏物語」を、後者は四代目の米国の若いティーチャーで月四回オックスフォード大製リーダーを中心に日常会話をつづけております。

去る九月十五日、小田原市の有料老人ホーム「長寿園」を有志十人ほどで見学して参りましたが、入園したい等と本気で洩らす参加者もございました。

ここは昭和二十八年に加藤泰純さん（会津若松市生まれ、昭和二十四年上智大学経済学部卒、現在五十八歳）が、東京に近く、空気清澄の地小田原市を選んで建設したもので、現在有料老人ホーム（百人収容）、軽費老人ホーム（七十名）、特別養護老人ホーム（八十名）、計二百五十名収容しています。入居の際二千万円近い債券を買わねばという事からかまたはもっともトラブルの起こりやすい事情をもつのがそうさせるのか、半分が医師の家庭との事に驚かされました。その他大学の先生、商事会社、大使、書記官等の家庭が多く、また変わりだねとしては三十年以上も用務員をしてその退職金で入り、優雅に暮らしているという人も、また〝老女殺さる〟なんていう新聞記事には絶対にならないここでの安心した生活等々。

ボケ老人になる多くは最高の地位にいた人や、女子大の先生でした等という方が、急に職を止めると生活様式の急変に応じきれず変になるとか、「下町のおばあちゃん連は絶対ボケませんネ」の言葉には深い意味を感じとりました。

小田原駅からタクシーで十五分くらい（湯本からは五分）、箱根登山鉄道三つ目の入生田（いりうだ）駅下車徒歩十五分、バスも一日三回くらい往復しているそうです。

以上

女医会としての会合を持つというよりは、熊本県在住の女医の親睦を図るという意味合いでの会合が、年に一度くらい開かれています。

この会合は、出身校の代表で構成する幹事会（八名）により計画され実行に移されます。

年次総会のあと、講師にお願いしました先生のご講演を拝聴したうえで会食というのが例年のならわしですが、会合の日時や場所の決定、演題の希望、そして講師の先生への依頼等が、幹事会で諮られることになるわけです。

会員の中には、育児に追われている年若い先生があるかと思えば、悠悠自適の老先生があり、幅広い年齢層にわたっていますが、非常に和やかな会合で、五十名ぐらいの、こじんまりとした集まりでございます（参考までに付け加えますと、この会合は、簡易保険団体加入による手数料で運営されています）。

この熊本県女医の会を、そのまま日本女医会につなぐという考え方には、いろいろと違和感があるように見受けられます。たしかに、日本女医会の存在は、それなりの意味合いを持つものであろうとは思いますものの、近いとは申しながら、ジェット機で二時間という隔たりを持つ中央との連携は、その割りにメリットが少ないのではないかと考えるのが、正直な気持ちでございます。

定款によりますと、「国際女医会に対し加盟団体としての協力」とありますが、日本女医会の総会に出席し、そのうえ、さらに外国で開かれる国際女医会に参加できるほど恵まれた女医が、果たして何人いらっしゃるものでしょうか。

つね日頃、漠然と感じております素朴な疑問を、思いつくままに書いてみました。何卒ご笑覧下さいますように――。

終わりに、日本女医会のますますのご発展をお祈りいたします。

思いつくまま

熊本支部　山本　節子

会報の原稿を書くように、との依頼を受けましたが、あらたまって文章を書くことに慣れていない私には何をどう書いたらよいのか、見当もつかず途方に暮れています。このまま何時間、原稿用紙とにらめっこをしていましても、文章は浮かんでまいりませんので、思いつくままを書くことで、役目を果たしたいと思います。

ご承知のように、熊本には医学部がありますので、年々、女医の数は増えてまいりました。昨今では、研究医も含めますと、二百五十名は下らないのですが、日本女医会員として籍を置いている者は、五十名にも満たぬという淋しい現状にあります。

このような状況をふまえて、日本

McWeeney 氏 歓迎懇談会に参加して

東女医学内支部　橋本　葉子

McWeeney 氏がアイルランドの女医会代表としてマニラで行なわれる国際女医会に参加される前に来日されました。日本の女医さんと懇談したいという申し入れがありましたので、去る十一月十六日に京王プラザホテル「御岳」の間で歓迎懇談会をいたしました。当日はオランダからもお二人お見えになるご予定でしたが、突然中止になりました。女医会からは、三神会長を始め、山本杉、久保田くら、柳瀬路子、藤井倚子、マッキンストリ千枝子、石原幸子、中村酉子と私の九人が出席いたしました。McWeeny 氏は family doctor として活躍しておられる一方、医師会の幹部として活躍しておられる由です。まずスライドでアイルラ

ンドの紹介をして下さいました。人口は北アイルランドが百五十万人、アイルランド（南側）が三百五十万人、医学部は七校、全部男女共学で、年間卒業生は三百五十人、この中の五十％弱が女性です。女子卒業生の三分の一はフルタイム、三分の一はパートタイム、三分の一は働いていないとのことで、McWeeney氏はパートタイムで働いておられる由です。アイルランドの医師の総数は二千九百人、その内訳は別表のようになります。次にアイルランドの風景および彼女の家や家族の紹介をしてスライドを終わり、食事をしながらの懇談会に入りました。女性のスペシャリストが非常に少ないのはなぜかという質問に対して、スペシャリストになるためには数年間の研修後二回試験を受け、その後さらに数年間ロンドンやアメリカの大学で研鑽を積んで初めてスペシャリストとして認められるため、非常に難しいとのことでした。女性のスペシャリスト二十五名中外科は四人しかいないそうです。医療制度が話題になった時、日本では卒後一年目の医師の診察料と大学教授またはスペシャリストの診察料は同一料金であるということに〝ridiculous〟という表現を使っていました。ちなみにアイルランドでは一回の診察料はスペシャリストは一～一・五万円、ファミリードクターは三千円くらいだそうです。またアイルランドでも日本と同様の老人医療問題を抱えていることを話しておられました。老人の四十％は低所得層のため全部政府が医療費を負担しているとのことですが、年二十一％のインフレと併せて政府財政もだいぶ苦しいとのことでした。また女医と家庭の両立の悩みなど、どこの国でも同じ悩みをかかえていることが良くわかります。McWeeney氏は非常に行動的な話し好きな方で、約二時間の懇談会はなごやかに楽しく終わりました。また彼女は開業している女医さんといろいろ話し合いたいご希望を持っておられましたが、スケジュールの都合でその機会を逸し、非常に残念がっておられました。

	全医師数	男性	女性
Specialist	1,200人	1,175人	25人
Family doctor	1,700人	1,450人	250人

忙中閑

人形と私

高知支部　楠目　節子

もう二十年も前の事でしょうか、入院患者の結核回復期の人や治癒した人たちのために、軽い作業で、楽しめて、生産性のある、きれいな手仕事として、人形作りをさせてみたらと思い、趣味の人形作りの得意な妹（弟の妻）に相談したところ、お土産品とした小さな人形をいくつか考案してくれました。

初めは珍しい事なので多数の人が始めましたが、だんだん減って熱心な上手な人だけが残り、製作最終段階で妹が少し手をかけると、いずれも商品として高知

福島県石川町の名誉町民第一号を授与されて

渋谷支部　添田　百枝

このたびの受賞にあたって、一言私の生まれ故郷について申し上げたいと存じます。東北本線、郡山市と白河市の中間、太平洋岸にむかって中間と申しましょうか。

さて、石川町は山と川の美しい自然に恵まれた古い歴史をもつ由緒ある町。陸奥国、白河国の変遷を経て、安倍氏の勢力圏にあり、源氏に移り一〇六三年より五百二十八年間初代石川有光公より二十五代昭光公まで、広大な領土を支配しておりました。明治九年福島県管下となり、昭和三十年町村合併により石川町を中心に、母畑村他四ヵ村が合併し、現在の石川町が誕生しました。

母畑村にある温泉の由来については八幡太郎義家が、奥州の安倍氏征討のおり、傷ついた愛馬を谷間にとどめ、わき出る泉で治したといわれ、義家は谷間に、神を祭り、母衣（ほろ）と旗を奉納したことから、母衣旗の由来を転化し母畑（ぼばた）とよばれるようになりました。私の生家はこの母畑の中心部に位し、現在は、次妹が父の医業を継続中であります。私は長女で弟妹五名（弟一名亡）。この家から医学を学び地域医療に貢献しています。

私は十二歳九ヵ月で、この平和な生家を旅立ち、十六歳九ヵ月で上京し、帝国女子医専に入学、細菌学を学び、ちょうど一回目の学年にドクトル・オット・ショーブル教授（帰化し、日本名、正古音）が来日し、この先生について、いながらにして、留学以上の研究と「学問をする心」を学ぶ最大のチャンスが与えられました。先生が六十二歳で急逝後、東京大学伝研（現在の東大医科研）で細谷省吾教授の門下生として、国内留学し、「一人一人の患者を治療することも大切だが、束にして治療することの方がなお必要」というお言葉に従い、短い期間に、多くの特効薬を発見する機会が与えられたわけでありまして、両教授のご薫陶に深甚な感謝を捧げます。

故郷においては、幼い時から、暖かい声援を受け、ふるさとは、遠きにありて、心のささえとなり、誇らしく有難きかな、と思いつつ、東京

市のお土産店へ通用するまでになりました。そのうちに病人の家族や近所のおばちゃんたちも仲間に加わって「よさこい節」でご存じの〝坊さんかんざし〟の人形がお土産品として定着したのです。

高知県女医会では、会員の友人が県外からグループで来られた時、ささやかなおもてなしをする事になっていまして、この〝坊さんかんざし〟の小さな人形を何回かお土産品として差しあげたことがありますので、皆さまの中には思い当たられるお方もおありかと存じます。

製作の腕が上がるにつれて、年中の仕事となる安定した注文がほしいという作り手の要望が強くなって、三月節句の十五人揃いのお雛の製作にとりくんだのです。器用でセンスがよくて研究熱心な妹の指導で、数年後にはその製品が雛屋さんに出ました。T・Bのアフタケアとして発足した人形作りが、いつの間にか独り歩きするようになり、お店も持って、今では本場の京都でも大手を振って雛人形・市松人形が取り引きされているのです。

私の人形作りは一向に上達しませんが、新しい作品ができると「これ、どうでしょう!!」とまず私に見せてくれるので、言いたい事を言って楽しませてもらっています。

幼時から人形が好きで、女学校へ入ってからも休みで帰省すると人形遊びをしていて、母から「まだそんな事をしているのかね。」と笑われたものです。いくつになっても人形に関心があって、最近では飾っておくだけの「静」の人形よりも弄ぶいわゆるおもちゃに属する愛くるしい、素朴な、抱き人形や着せかえ人形に心ひかれるのです。それらに自分の幼いころの、また若かりしころの思い出多いおべべを着せてみたらと、そんな思いをして楽しんでいます。

私も昔を懐しむ年代になったようです。

(57・11)

市松人形

の生活のあけくれは、今でも、研鑽を積みに来た旅人のようなものであります。

幸に、故郷においては卓越した有賀博町長をはじめ、諸公の推戴に対し、また石川町民の暖かいご声援に対し、深甚なる敬意と感謝を表する次第であります。

また出身校を問わず暖かいお励ましの言葉をいただいて今日に到りました。日本女医会会員の皆様にも、この機会を与えてくださった会長をはじめ諸姉に対して、心からなる感謝を捧げたいと存じます。

(受賞は昭和五十七年十一月六日)

理事会議事録

日時　昭和57年9月25日

場所　日本女医会　会議室

出席(敬称略)

三神、小俣、福永、山崎、稲葉、久保田、佐藤、佐野、白橋、野沢、平瀬、丸山、森川、八木、柳瀬、明石、荒木、石川、石原、井上、鵜川、川口、鈴木、関口、野呂、蓮井、藤田、町田、三好、森、山本、添田、西山、山口

欠席(敬称略)

橋本、川島、藤井、マッキンストリ

庶務報告　野沢常任理事

7月24日　常任理事会を行なう

集中豪雨見舞を長崎、山口、熊本、大分および佐賀支部へする。

丸茂重貞氏ご逝去にたいし弔電をする。

8月3日　全国女子医学生連絡会結成式にあたり祝辞発送。

会員名簿掲載のため広告依頼をする(三一社)。

台風一〇号被害見舞を山梨、三重、群馬および栃木支部へする。

8月31日　日本女医会誌九一号、年金パンフレット、会員移動届、会費請求書、振込用紙を会員に発送。

9月14日　台風一八号被害見舞を静岡、埼玉、長野支部へする(静岡支部、長野支部より異状なしの連絡あり)。

9月16日　国際婦人年連絡会より五政党の婦人政策を聞く会へ柳瀬常任理事出席する。

その他

(1)今村定子先生(長崎支部)小野蓁子先生(新宿支部)へ集中豪雨見舞金を贈る。

(2)故梶原寿栄先生、故佐藤雪子先生ご遺族より香典の礼状あり。

(3)厚生省援護局長山本純男氏、厚生省医務局医事課長横尾和子氏より就任の挨拶あり。

(4)渋谷二丁目祭礼にお祝をする(三千円)

(5)厚生統計協会出版「国民衛生の

動向」資料として購入する

(6)サンケイ新聞に献血キャンペーン広告に当会掲載する（9月28日新聞紙上）。

連絡事項

(1)昭和57年度公開講演会について。

(2)昭和57年度婦人教育国際交流事業について。

(3)アジア太平洋成人教育協議会日本会議開催について。

(4)日本家庭福祉会より全国「生きがい」作文コンクールについて。

会計報告　佐藤常任理事

7月、8月分別紙どおり　承認

議題

一、昭和58年総会について

日時　昭和58年5月28日

場所　岡山市　岡山プラザホテル

観光　昭和58年5月29日

Aコース

後楽園、倉敷より鷲羽山方面

Bコース

後楽園、備前焼窯元、竹久夢二記念館など見学

観光、宿泊等の詳細については、後日会員に通知する。

二、会員名簿発行について

(1)名簿代及び名簿送料代として前回どおり一、〇〇〇円徴収する。

(2)広告を依頼し、広告料は前回同額とする。

(3)名簿発行に関しての費用について

予算

名簿引当金

三、七七九、〇〇五円

昭和57年度予算額

一、〇〇〇、〇〇〇円

広告料

約一、二〇〇、〇〇〇円

支出

印刷代

二、六〇〇、〇〇〇円

郵送料

八〇〇、〇〇〇円

三、講演研修会について

日時　昭和58年2月27日

会場　東京都　京王プラザホテル

演題および演者

北原白秋の色の世界

名古屋大学教授・市川　宏

医療をめぐる諸問題

日本医師会常任理事・佐野正人

吉岡弥生賞授賞者業績発表

堀口　文

詳細は後日通知する、懇親会については久保田常任理事に願う。

四、その他

(1)インドシナ難民のためのチャリティパーティの案内について。

日時　昭和57年10月13日

場所　ホテルオークラ

(2)市川房枝記念事業について

婦選会館増改築募金の依頼あり、当会予備費より一〇〇、〇〇〇円支出する。

(3)優生保護法の一部改正について

優生保護法第一四条一項四号「妊娠の継続または分娩が、身体的または経済的理由により母体の健康を著しく害するおそれのあるもの」の中から「経済的理由」を削除する改正案に反対する連絡協議会に加盟する。

(4)前進座観劇について

日時　昭和57年12月19日　午前11時開演

場所　新橋演舞場　観劇料　五千五百円

「助左衛門四代記」、「勧進帳」

(5)学術研究助成報告について

第3回学術研究助成の公募をする。

第1回学術研究助成者の研究論文抄録集を発行する（印刷費用は、約二七〇、〇〇〇円）。

(6)第三十七回国連総会に日本政府代表として山崎副会長が、ニューヨークへ出向するので、やむを得ず国際女医会マニラ会議を欠席する。

したがって国際連絡書記の任務遂行者として中村西子会員にそれを依頼する。

(7)レッドショー国際女医会長が10月1日から4日まで日本に滞在するので懇談会を行なう。

日時　昭和57年10月2日　午後6時

場所　ホテルオークラ・山里

会費　一五、〇〇〇円

(8)オランダの国際連絡書記アベレンと元国際女医会長ベルファーゲンおよびアイルランドよりマックウィニー女史が、マニラ国際女医会議前に来日予定である。この機会に11月16日懇談会を催す。

(9)日本女医会誌の印刷会社を変更する。

(10)ニュージーランド旅行会員募集について

日本交通公社よりニュージー

会員の消息

＊林　千代（千葉支部）

東邦医・昭和7年卒

――昭和57年秋、勲五等　瑞宝章を受賞された。

＊竹内静香（静岡支部）

関西医・昭和19年卒

――昭和57年8月31日、静岡県熱海市市会議員に当選された。

＊脇本トキ（北海道支部）

東女医・昭和6年卒

――昭和57年9月11日、永年にわたり地域医療および公衆衛生の分野に尽力されたご功績に対し、厚生大臣賞を受賞された。

＊福永ひろ子（神奈川支部）

関西医・昭和18年卒

――昭和57年10月14日、永年にわたり、地域医療と地区の繁栄に協力し、国保事業への多大なるご功績に対し、厚生大臣賞を受賞された。

＊山崎倫子（都下支部）

東女医・昭和18年卒

――昭和57年10月6日～24日、第37回国連総会に日本政府代表としてニューヨークへ出向された。

＊添田百枝（渋谷支部）

東邦医・　昭和11年卒

――昭和57年11月6日、生涯を医学の進歩発展に捧げられた偉大な功績を称えられ、福島県石川町の名誉町民と町民章を贈られた。

初めての試みとして、会員の消息欄を設けました。今回は昭和57年4月以降、広報部で得た情報を基として掲載しましたが、他にも多数の該当者がおいでのことと思います。何卒、本部・広報部までご一報をお待ちしております。

1月29日（土）午後一時半より四時まで、渋谷区代々木の婦選会館において国連NGO国内婦人委員会主催で、総会の報告をされます。

ランド周遊の旅のパンフレットを会誌発送の際封入したいとの申し出あり。
期間　昭和57年12月25日～昭和58年1月1日
費用　五七〇、〇〇〇円

(11)国際女医会の募金および物品募集のお願いあり。

(12)前会長龍知恵子先生ご遺族より三〇〇、〇〇〇円の寄付あり。

(13)理事会議題はあらかじめ一〇日まで提出することを厳守してほしい。

日時　昭和57年12月19日
場所　銀座東急ホテル

出席（敬称略）
三神、小俣、福永、久保田、佐藤、佐野、白橋、野沢、橋本、平瀬、森川、八木、柳瀬、明石、荒木、石川、石原、井上、鵜川、川口、川島、鈴木、関口、野呂、マッキンストリ、三好、森、添田、西山、

欠席（敬称略）
山崎、稲葉、丸山、蓮井、藤井、藤田、町田、山本、山口

庶務報告　（久保田常任理事）
10月23日　常任理事会を行なう。
11月2日　創立六五周年記念特集号、学術研究助成研究報告書、日本女医会誌九二号、年金パンフレット、会費納入依頼、振込用紙、ルーペンダンパンフレット、ニュージーランド周遊の旅案内を発送。
11月5日　国際婦人年日本大会の決議を実現するための連絡会に柳瀬常任理事出席。
11月9日　広報部会開催。
11月11日　優生保護法「改正」阻止連絡協議会へ柳瀬常任理事出席。
11月15日　婦選会館二〇周年記念会へ柳瀬常任理事出席。
11月16日　アイルランドよりモニカ・マックウィニー氏来日につき歓迎懇親会を京王プラザホテルにて行なう。
11月21日～27日　国際女医会第18回国際会議、マニラにおいて開催、日本より三九名出席。
11月30日　各支部長へ公衆衛生助成、へき地診療助成に該当される方の推薦を依頼す。
NGO役員会に柳瀬常任理事出席。
12月2日　会員名簿発送。
12月6日　国際女医会五〇年会員（一一〇名）に表彰状を発送。
12月9日　国際人権規約完全実施促進連絡会より外務政務次官に面会に柳瀬常任理事出席。

その他
(1)桜映画社より長編記録映画「八十七歳の青春」に引き続き短縮版完成にあたり当会の推薦をいただきたいとの要望に対し発行する。
(2)故大石アヤメ先生ご遺族より供養の品あり。
(3)故井口与志子先生、故東条松子先生ご遺族より香典の礼状あり。
(4)世界身体障害芸術家協会より支援の礼状あり。
(5)創立六五周年記念特集号、会員名簿、国際女医会五〇年会員の表彰状発送に対しそれぞれ礼状あり。

連絡事項
一、昭和57年度全国婦人教育交流集会の案内。
二、インドシナ難民を助ける会よりチャリティ・パーティの案内。

会計報告　佐藤常任理事
10月、11月分別紙どおり　承認

議題
一、会議のあり方について
配布資料について意見がある場合は、次回理事会に提出のこと
二、昭和58年総会について
定時総会の案内を会誌に掲載し、会員に連絡する
三、その他
(1)日中医学協会より臨時会費納入に関する依頼の件
五〇、〇〇〇円納入を決定
(2)労働省婦人少年局婦人課より「第三五回婦人週間について」アンケート依頼の件。
アンケート提出を渉外部作成
(3)優生保護法「改正」阻止連絡協議会より請願署名と分担金支払について。
優生保護法改正に反対する請願署名を今月末まで事務局に提出を理事各位に依頼。
本会の自由意志による分担金は、一〇、〇〇〇円とする。
(4)吉岡弥生賞審査委員会構成メンバーは前年どおりとする。二名の欠員については、委員会で選出する。
三神美和、山崎倫子、小俣喜久子、川野辺静、川那部喜美子、中川冨士、橋本恵美子、荒川あや
(5)昭和58年度事業計画及び予算案について次回理事会までに各部ごとに検討を願う。
(6)学術研究助成研究経過報告書製作費用および送料代として約四七万円を要したが、この支出科目については、研究助成と機関紙の科目から支出する。
(7)国際女医会マニラ会議の報告
イ、過去国際女医会副会長として活躍の佐野アヤ子氏は、このたび副会長を退任した。
ロ、日本女医会より一〇〇〇ドルの寄付をする。またバザー物品の売り上げは、三〇〇ドルに達した。
ハ、フィリピン女医であるデルモンド女史の病院へ創立六五周年記念バザー行事収益金一部五〇〇ドル寄付した。
後日礼状あり。
(8)マッキンストリ千枝子氏の電話番号七〇五―二八三七を七〇五―一三〇四に訂正
(9)広報部会を11月9日、12月17日開催した。
(10)国連NGO総会の報告会が、昭和58年1月29日予定されているので都合のつく方は出席を願う。

以上　久保田くら
野沢　良美

常任理事会議事録

日時　昭和57年10月23日
場所　日本女医会　会議室

出席（敬称略）
三神、小俣、福永、稲葉、久保田、佐藤、佐野、白橋、橋本、森川、八木、柳瀬

欠席（敬称略）
山崎、野沢、平瀬、丸山

庶務報告　久保田常任理事
9月25日　常任理事会、理事会、マニラ旅行参加者説明会（役員）を行なう。
10月2日　レッドショー国際女医会長来日につき歓迎懇談会をホテルオークラ「山里」にて行なう
10月13日　インドシナ難民のためのチャリティ・パーティに三神会長出席する。
10月14日　国際婦人年日本大会の決議を実現するための連絡会へ柳瀬常任理事、山口監事出席する。

その他
(1)今村定子先生（長崎支部）より集中豪雨見舞に対し礼状あり。
(2)故佐藤雪子先生ご遺族より供養の品あり。
(3)故梅沢イエ先生、故東條松子先生、故大川璟姫先生ご遺族より

香典の礼状あり。

(4)日本有職婦人クラブ全国連合会より「三〇周年記念祭典」への招待あり祝電をする。

(5)特約店銀座ムネトモ扱真珠ネックレス一〇個販売あり、特約店リッカーミシン扱ミシン一一台、電子レンジ九台販売する。

連絡事項

(1)日中天然薬物シンポジウム準備委員会より学会のお知らせについて

(2)昭和57年度婦人労働旬間実施に対する協力方依頼について

(3)銀座ムネトモよりセラリオン新作ジュエリー発表会の案内について

(4)横浜松坂屋より「原爆展」の招待券あり。

報告事項

(1)国際婦人年全体会へ出席の柳瀬常任理事より別紙報告あり。

(2)インドシナ難民のためのチャリティパーティへ出席の三神会長より難民救済活動の報告あり。

(3)国連総会に日本政府代表として出向している山崎副会長よりの書簡の紹介あり。

(4)「パールと洋子」著者池部洋子氏の本の紹介あり。

以上　久保田くら

会員動静

新評議員（敬称略）

都下支部　清水五百子

新予備評議員（敬称略）

都下支部　吉田実子

入会会員（敬称略）

北海道支部　指田裕子
青森支部　村上喜久子
栃木支部　細川千和子
新宿支部　瀬木和子
杉並支部　橋口京子
大阪九支部　三原啓子
京都支部　松村美代
香川支部　大内通江　矢島ふみ
徳島支部　江藤和子

自然退会復活者（敬称略）

千葉支部　西川　恵
品川支部　氏原多満子

新卒入会会員（敬称略）

文京支部　加藤多津子
都下支部　新井康子
神奈川支部　常磐ひとみ
大阪九支部　中林仁美
徳島支部　森　浩子

退会会員（敬称略）

北海道支部　金谷恵子　伊藤チヨ
青森支部　野村由美子
埼玉支部　宮崎俊子　加茂雅子
加茂和子
千葉支部　三上朋代
品川支部　若園みち子
渋谷支部　野田順子
神奈川支部　加島伊勢子
静岡支部　金子あや子
愛知支部　杉田　合
石川支部　小坂牧子
京都支部　河井紀子
兵庫支部　道山琴美　戸田　操
岡山支部　中島倫子
広島支部　大林貞子
山口支部　島本道子
愛媛支部　真鍋綏子
福岡支部　久山万須子
佐賀支部　池田照世
長崎支部　川端　睦
熊本支部　吉富道子

物故者会員（敬称略）

訃報に接し哀悼にたえず謹しんでご冥福をお祈りいたします。

足立支部　大石アヤメ
長野支部　藤巻いく
岡山支部　井口与志子
香川支部　東条松子

編集後記

新年おめでとうございます。

躍進する亥年のお正月を、会員の諸先生方には、お健やかに、お迎えくださいましたことと、お慶び申し上げます。

お蔭様で、九十三号の会誌は、三神会長の新年のご挨拶と、十八回国際女医会議の特集、その他に新年号として、ふさわしい充実した内容で、おとどけできましたことは、たいへんうれしく、ご多忙中のところ、玉稿を賜りました諸先生方に、広報部一同、心から感謝申し上げます。三神会長の本年の抱負の一つの課題として、東京都の大世帯をまとめて、東京都内支部連合会をつくり、一つの目的を持った仕事をしたいとのお言葉に、各自が知恵をしぼりだして、立派な会に発展させなくてはならないと、責任を深く感じました。

第三十七回、国連総会に、日本政府代表として、山崎副会長が、ニューヨークへ出向されるため、国際女医会マニラ会議の、国際連絡書記の代行を、中村酉子先生に依頼され、今回、立派に、大任を果たされました。

国際女医会副会長の佐野アヤ子先生は、早くから、マニラに行かれ、募金委員長としても、活躍され、大成功を収めました。

開会式での、マルコス大統領の演説は、たいへん立派で、女医に対する信頼が深いのに感銘、また、心温まる歓待をうけられ、大満足のご様子でした。学術講演のテーマは「心ある医療」で、患者に対して、心理学的な面を考えて、治療しなければならないとの結論でした。原弥栄子先生の桂林の旅では、漓江下りの圧巻さ、そびえ立つ山々の連なりが眼に見えるようです。弓場光子先生のバリ島とシンガポールの旅では、きらきら輝く太陽の地上最後の楽園、情熱の夜はケチャックダンスがひびくようです。

国際女医会長のオーストラリアのRedshaw女史の公式訪問、アイルランド女医会のMcWeeney女史の来日で、東京女子医大の見学と討論会、歓迎会の報告を、橋本葉子先生に急にお願いして、感謝の二字のみです。楠目節子先生のT・Bのアフターケアから、かわいいお人形作りに趣味をのばされ、優しさが伝わってきます。

各部だより、支部近況の他に、会員消息欄を設けました。今年も、広報部一同、心を一つに「待たれる楽しい会誌」を目標に努力いたします。いろいろと先生方の助言や苦言を、お寄せください。猪々年を祈りつつ。

（井上）

昭和58年1月20日　印刷
昭和58年1月25日　発行
編集人　八木　貞子
発行人　日本女医会
発行所　東京都渋谷区渋谷2－8－7青山宮野ビル
社団法人　日本女医会
TEL（498）〇五七一
東京都文京区水道1－5－16
制作　株式会社　金剛出版